

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270202460		
法人名	医療法人社団 平世会		
事業所名	グループホームひろた		
所在地	長崎県佐世保市広田1丁目4番7号		
自己評価作成日	平成 27年 12月 9日	評価結果市町村受理日	平成 28年 2月 17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/42/index.php?action_kouhyou_detail_2014_022_kani=true&JigyosyoCd=4270202460-00&PrefCd=42&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構		
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1		
訪問調査日	平成 28年 1月 6日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>・スタッフ個々の長所を引き出し互いに協力し合いながら、チームケアで入居者様の思いに寄り添ったケアができるように日々努めています。</p> <p>・地域の中学、高校、短大、大学、専門学校からの実習や職場体験の受入の他、保育所との交流会も定期的に行っています。その一方で講習会や高校の授業など、事業所から地域に出向き、認知症の理解を通して地域との交流や情報交換、介護の仕事のPRも行っています。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>近隣の学校などの職場実習・体験のほか、演芸ボランティアの受け入れや保育所との相互交流などホームの機能を活かした様々な取組が窺える。運営推進会議には役職に関係なく現場の職員が各ユニットから参加しており、運営推進会議で報告する機会を設けることで、職員自身が理念に立ち返り、自己を振り返る機会や「責任」や「誇り」を感じてもらおうといったよい経験につながっているものと思われる。自己評価は全職員で取組んでおり、各ユニットの主任が取りまとめた上で施設長がホームとしての自己評価結果を作成し、課題点の抽出や改善する機会につなげ、毎年自己評価することの必要性を理解している。各ユニットの主任を含めた職員は、日々の介護実践について常に問題意識を持って取組まれていることが窺え、日々の気づきなどは会議等で共有し、模索しながらも、まずは挑戦してみるといった姿勢で入居者本位の介護を実践するよう取組まれている。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ひろた2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価
			実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営				
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「感謝の気持ちを忘れずにやさしい手と確かな手で共に歩みます」を理念に掲げ、その1つひとつの言葉の意味を判りやすく表記して掲示している。職員は共通認識のもと、日々の業務に反映できるよう努力している。	開設時より理念をつくる際のキーワードとして入居者や地域の方への「感謝」の気持ちを忘れないことを踏まえ、現場職員と共に理念をつくり上げた経緯があり、新規採用時に理念の意味を伝えたり申し送り時に理念を唱和するなどして共有につなげ、日々の実践で具体化できるよう努められている。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩する時は近隣住民の方々と挨拶を交わしたり、馴染みの方々との触れ合いは日常的で、同じ町内の保育所との交流や中・高・大学生との実習等の受入れなども積極的に行っている。	同法人の医療機関と通所介護事業所が隣接しており、定期受診の際に顔なじみの関係をつくられたり通所の利用者や慰問の方が立ち寄られるなどのつきあいが窺える。自治会副会長の協力を得て地域の方に呼びかけ介護教室を実施した経緯も窺えた。近隣の保育所との相互交流が年5回あり、現在まで約5年間続いている。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近隣の中・高・大・専門学校からの職場体験や実習受入の他、認知症サポーター養成講座に出向き認知症の理解に関する活動をしている。また佐世保市委託事業の介護教室はグループホームが中心となって企画している。	
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	活動報告では行事や各ユニットの状況を、そしてインシデント・アクシデント報告では委員の皆様から客観的な目線で助言を頂くことができ、再度フロアに持ち帰りサービスの質の向上に繋げる努力をしている。	運営推進会議には役職に関係なく現場の職員が各ユニットから参加し、状況報告がなされている。各委員からは客観的な意見を出してもらうなど、双方向の会議の場となるよう努めている。職員が運営推進会議で報告する機会を設けることは、理念に立ち返り、自己を振り返る機会や「責任」や「誇り」を感じてもらおうといったよい経験につながっているものと思われる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	主に管理者が窓口となり行政との連絡を取っている。また佐世保市グループホーム連絡協議会東部ブロック研修を通して他施設の職員との意見交換も定期的におこなっており、必要な情報は共有し、関係を大切にしている。	行政とは運営推進会議を通じた情報提供や管理者による連絡等により協力関係を構築するよう努められている。現場の職員が企画した研修会を佐世保市グループホーム連絡協議会東部ブロックを通じて開催し、他施設職員との交流や意見交換を行うなどの取組が窺える。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人のコンプライアンスルールを全職員は理解をした上で、日々の業務の中で身体拘束をしないケアの実践に努めている。また身体拘束廃止の研修を通して全職員で自分たちのケアの振り返りにも繋がっている。	職員は法人のコンプライアンスルールの理解に努め、身体拘束に関する研修会に参加するなどして拘束をしないケアの実践に努めている。各ユニットの主任を含めた職員は日々の介護実践について常に問題意識を持って取り組んでいることが窺え、日々の気づきなどは会議等で共有し、模索しながらも、まずは挑戦してみるという姿勢で入居者本位の介護の実践となるよう取り組んでいる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人のコンプライアンスルールは訪れた家族にも見てわかるように掲示をしており、職員は襟を正す姿勢を持って、運営推進会議や研修の報告、新聞などの記事などを通して、その都度テーマに掲げ考える機会を設けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	開設以来対象のなる方はいないが、いつでも対処できるよう研修会があれば参加して職員間でさらに知識を高めたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は管理者と主任が入居者・家族の時間に合わせて余裕をもって説明をしている。また改訂の際はその内容や主な変更点等を管理者より説明を受け、全職員がきちんと理解した上で入居者と家族に説明・同意を頂くようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の来訪時に必ず近況報告とケアプランの実施状況を伝え、意見を頂きながら情報を共有して生活の質の向上に努めている。玄関に設置している意見箱に今のところ投書はないが、外部からの意見もいつでも取り入れる環境を整えている。	意見箱を設置して家族等から意見を汲み取るよう配慮し、開設当初は意見を頂くこともあったが現在は無い。家族の定期的な訪問時に意見を聞くよう努めている。状況により施設長が直接家族から意見を窺う機会もある。家族の意見を汲み取る為のアンケート調査など今後の更なる取組に期待したい。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月開催の主任会議、各ユニットの会議、全体会議に毎回出席し、職員の意見や提案をタイムリーに業務に反映できるよう努めている。業務以外でもプライベートな相談にも気軽に話を聞いてもらい、いつも職員を気遣ってくれる。	職員の意見は、各ユニットの主任が聞き、状況に応じて施設長が聞く体制であり、物品関係の要望などはできるだけ早期に対応するといった配慮が窺える。職員の定着度も高いホームである。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	日頃より職員の健康状態や冠婚葬祭、家族の事情を考慮し、仕事と家庭の両立に支障がないよう勤務体制や必要な調整など臨機応変に対応してもらっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修や法人内の研修等、参加の機会を常に確保してもらっている。参加した職員の報告書は併設事業所も含め回覧という形で、その内容を理解できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	佐世保市グループホーム連絡協議会や東部ブロック研修や母体医院関連のセミナー案内等に積極的に参加して、他職種との交流を通してサービスの質の向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前訪問や個別面談、見学等で現在の状況やこれまでの経緯等の情報収集を行い、新しい環境に1日でも早く慣れて頂く様、当面の援助方針を職員間で協議し、本人・家族とも相談しながら関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約時には入居に関しての家族の思いや支援にあたっての事業所への要望等を細かく訪ね、入居後も些細な事でも相談して頂ける様、家族とのコミュニケーションを心がけながら、関係作りの構築に力を注いでいる。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前訪問や初期面談などで本人と家族の思いや意向等を聞き取り、本人目線で担当職員を中心に職員間で必要な支援の具体化について話し合い、安心できるサービスの実践に繋げている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	人生の先輩に対し、常に感謝の気持ちを忘れずに、日常生活においてはその方のできる部分や興味・関心のあることを尊重しながら活動して頂いている。また行事についても入居者と職員が一緒に計画をたて開催するなど共に楽しんでいる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時には必ず近況報告を行い、また定期的に足を運ばない家族に対しては随時電話で連絡を取り合っている。また、ドライブで外出する際は家族にも事前に連絡を取り参加の意向を確認して、共に過ごす時間を大切にしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今まで通りの手紙のやり取りや友人や親族らの訪問を大切にしている。外部からのボランティア演芸では併設事業所の入居者との交流も意識して準備している。また法人の夏祭りや介護教室でも地域の方々との馴染みの関係を築いている。	外部からのボランティアについて積極的に受け入れられていることが窺える。入居者のレベルにもよるが、映画を見たり皿うどんを食べに行くなどの支援や年賀状等の作成支援、誕生日などのイベントのやり取りのほか、要望に応じて月1回程度の理美容の支援があるなど、馴染みの関係を築けるよう努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の性格や関係性などを把握し、孤立されることがないようにテーブル席やソファに座る位置関係にも配慮している。日常的に入居者同士の和やかな支え合いの関係が築かれている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	同じ地域の方が多いため退居後も家族とお会いした時は近況を尋ねたりすることができる。また介護教室や夏祭りの行事に来て下さったり、ボランティアで演芸訪問して下さる方もおり、これからもこの関係性を大切にしたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の体調や顔の表情、仕草、態度などを観察し、本人や家族ともコミュニケーションをとりながら、それぞれの思いや意向に沿えるよう職員間で日々確認し把握するよう努めている。	業務日誌には入居者の言動など職員の気づきを記入できる様式で、昼夜を含めた入居者の様子が1目で分かるよう工夫し、各職員が情報を共有できるよう努めている。相談録やフェイスシートを活用してその方の情報を収集し、職員間で共有を図り、アセスメント、介護計画の立案へとつなげていることが窺える。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前訪問時に生活歴や環境などの情報収集を行い、本人と家族以外に関係機関や担当ケアマネジャーからの情報も得た上で、入居後も安心な生活を送れるよう支援に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	業務日誌や生活チェック表を元に朝と夕方の申し送りや当日の状態を把握している。併せて母体医院とは申し送りノートを通して日々の入居者の状態や予定等を伝達し、担当看護師との情報共有を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	事前検討用紙を用いて職員一人ひとりの視点での意見を取りまとめ、担当者を中心に本人と家族の意向も踏まえてカンファレンスを行い、現状に即した介護計画を作成している。	各職員がその方の支援についての意見を事前検討用紙を通じて抽出し、本人や家族の意向を踏まえケアカンファレンスを行い、介護計画が作成されている。各ユニットごとに視点は異なるものの特徴があり、計画に挙がる目標設定は、達成できる具体的な目標を意識したものが立案されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者の日々の状態や変化などを集約した業務日誌を活用して職員間で状態を把握し、ケアプランチェック表ではサービス提供状況を確認するなど、状態の変化に応じて随時計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	当事業所単体で考えるのではなく、併設事業所との連携のもとで本人と家族の思いに柔軟に対応できるよう日頃から取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣の保育所との交流や同じ地域のボランティアの方々による演芸訪問、学生たちの実習や体験学習など、たくさんの地域の方々との交流の機会が年々高まってきている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主にかかりつけ医を当院を希望され受診されているが、病状によっては他の医療機関を受診する際は家族の意向も伺い、職員も同行して速やかに適切な医療を受けられるよう努めている。	医療法人が運営母体で、医療機関が隣接しており、入居時には多くの方が同医院へかかりつけ医を希望されている。また、その方の病状により専門医等につなげ、職員が同行するなどの配慮が窺える。毎週木曜日には担当看護師が訪問して、入居者の健康状態について連携し対応されている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎日、母体医院の担当看護師と申し送りノートにて入居者の健康状態を報告。毎週木曜の午後は担当看護師が事業所を訪問し職員からの聞き取りや入居者に接するなどして状態把握し、必要に応じて指示を受け対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	当院や他の医療機関に入院された場合でも定期的に面会に行き、関係者や家族と連絡を取りながら早期より退院に向けた受入れ体制を整えるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化された場合は、主治医・看護師長・管理者・主任が家族の意向を確認した上で、今後に向けた方針を一緒に協議をしている。当事業所でのターミナルを希望される場合も当院と常に連携を取りながら支援に努めるようにしている。	入所時には重要事項説明書で説明し、同意を得ている。終末期にあたっては家族にはターミナル期に向けた方針に基づきホームとしてできること及びできないことを説明し、家族の意向、主治医との連携のもと支援するよう努めている。今後、看取り介護への職員の経験・知識・技術のほか、精神的な不安等も考慮した更なる取組に期待したい。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	フロアーに緊急セットを備えており、毎月1回は点検を実施。急変時に備え心肺蘇生法などの緊急マニュアルを作成、年2回の法人内の勉強会や内部研修を通し、常に実践力を身に付ける努力をしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	主に夜間火災を想定した避難訓練を法人全体で年2回実施している。管理者が主となって自治会や東消防署へ出向き災害時の理解協力をお願いしている。自然災害時の訓練は未実施のため、今後は自治会の協力も得ながら、当事業所単独の訓練も含め、さらに対策を講じていきたい。	火災訓練については隣接の病院と合同で夜間帯を想定しての訓練が実施されている。防災計画については、近隣河川の氾濫を想定した自然災害等地区の実情に応じた計画を反映させるよう現在検討中である。	避難時における持出用一覧表については、各居室入口に名前と状態のわかる写真を名札にして準備している。これに必要な情報の追加、または別途持出用一覧表を作成するなどの今後の取組に期待したい。自然災害等については、ハザードマップを入手するなどして各種自然災害を想定した今後の計画策定と、災害後の入居者受入れ施設と連携した訓練の実施といった今後の取組に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の先輩であり、お一人おひとりの人格を尊重し、状況に応じた言葉かけやその方にとって判りやすい対応を心がけている。入居者間で孤立したり不理になりそうな方に対しては、早めに職員が介入し関係調整を図るよう心がけている。	職員は接遇マナー研修へ毎年参加されている。入居者を尊重し威圧的にならないようにし、普段の言葉かけなどで気になった際には主任が注意したり、接遇委員会を結成して自己チェックを行うなどの取組が窺える。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃からコミュニケーションをこまめに行い、その会話の中でその方の思いや希望が何なのかを少しでも理解できるように、職員間でもちょっとした気づきなども共有して、できるだけ自己決定を促すような働きかけができるように心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	主に1日の日課に沿ってその方の体調やペースに合わせて体操やレクリエーションを取り入れながら、残存能力を活かして楽しく生活できるように支援しているが、職員の体制上対応が困難な場合は、予め説明し同意を頂いて日課の調整をすることもある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その日の天候、また本人に尋ねながら毎日衣類を着替えて身だしなみと清潔保持に努めている。訪問理美容ではその都度本人と家族に相談しながら実施。外出時や行事の際は口紅をつけたり、お出かけ用の服に着替えたりしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	日々の会話の中で季節に応じた食材や食べたい料理を入居者に尋ねたりして献立にも取り入れている。またそれぞれの能力に応じて献立ボードの記入やお盆拭きなどの役割を持って頂き、共同で食に関わることができている。	献立は2週間ごとに各ユニットの職員全員が意見を出し合って作成している。東部ブロックの外部研修会において管理栄養士からの助言も献立の参考にしている。職場体験に参加した学生などが入居者と一緒にご焼きやお好み焼きを作ったり、流しそうめんをするなど食事を楽しむ機会がある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1日の飲水量を個別にチェックしているが、あまり飲まない方には小分けして飲んでもらったり、家族と相談して好む飲み物等で工夫して確保するよう努めている。食事量や形態、大きさなどその都度状況に応じて対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは必ず促し、個々に応じて準備や介助、見守りを行いながら対応している。技師の必要な方には家族の同意を得て歯科受診や訪問歯科を依頼し治療をして頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄のリズムを把握し、早めの声かけや入居者の表情や仕草からサインを察知して、自尊心を傷つけないようにさりげない声掛けで対応を行っている。	日常生活のチェックシートに排泄状況を記録し、入居者の排泄のほかバイタル、食事摂取量など日々の状態について把握し、各職員と共有を図るよう努めている。見当識でトイレの場所が分からない方へは職員が同行している。部屋の場所については文字の大きさや人形等を飾るなど、配慮するよう努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	日課で1日2回実施している体操や運動の他、食事面でも乳製品や食物繊維を取り入れた食事の提供と水分補給を心がけ、便秘の予防に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	日中を通して入居者の身体状態や個々の入浴のタイミングに合わせて支援している。体調不良で入浴ができない方は清拭や足浴等に対応し、日頃から清潔を保つようにしている。	入浴理念を作成し掲示している。入居者に応じて同性介助や入浴剤の使用のほか、その方に合わせて湯の温度を設定することなど、その方がリラックスして入浴を楽しめるよう工夫していることが窺える。入浴日は週2～3回で設定されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中はソファでくつろぐ時間を設けたり、それぞれの体調に合わせて午睡や休息を促し生活のリズムを整えている。毎日居室の掃除やリネンの交換など心地よく過ごして頂く環境作りを心がけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の種類や内容等を把握できるよう、入居者薬リストを元に、服薬前の確認作業時にリストを照合しながら間違いがないように服薬介助を行う。薬変更の際はリストを修正し、全職員間で申し送りを行い管理を徹底させる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人と家族からの情報を収集し、その日の体調を考慮しながら、個々の能力に応じて役割的な活動ができるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に応じてドライブや近隣の散歩や買い物など可能な範囲で外出し、ドライブの実施前には家族にも連絡して参加を募り一緒に楽しんで頂いている。盆・正月帰省や記念日には家族と外出して共に食事を楽しまれるなど協力を頂いている。	入居者の体調や時季などを考慮しながら、近隣のスーパーでの買い物やドライブなどの支援がある。外出時に家族にも協力の支援を仰ぐなど外出支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居契約時に家族と金銭の管理について確認をし、同意の下職員が管理させて頂いている。外出時はお小遣いを持参し、好みの物を購入・支払いをしてもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族等からの手紙は直接本人に渡したり、読めない方には職員が代読する。贈り物が届いた時は本人に代わってお礼の電話を入れ家族と話してもらい、併せて職員が近況報告を行うこともある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ソファーに座って入居者同士で会話を楽しまれたり、テレビと一緒に観たりしてのんびりと過ごされている。廊下の壁には外周した際の写真を掲示して季節感の演出を心がけている。	共用の空間は、季節感のある飾りつけや行事の写真を掲示するなど入居者が居心地良く過ごせるよう工夫している。エレベーターホールにはソファーを設置するなどし、日あたりがよく友人等と自由に過ごせる場所となっている。尚、共用空間(2階)の照明については、来訪者等のタイミングや状況を考慮しながら対応することに期待したい。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファーでくつろいだり、エレベーターホールで日向ぼっこしたり、バルコニーでは洗濯物干しや取り込みのお手伝いや、畳の間では洗濯物のたたみ等、それぞれが自由に過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	愛用品や馴染みの物、家族との思い出の写真、誕生カードなどを飾り、居心地の良い本人好みの部屋作りに工夫して取り組んでいる。	居室は適宜清掃が行われている。また、居室には特に持ち込みを制限することはなく、本人が使い慣れたものや好みのものなどが持ち込まれており、本人が居心地良く過ごせるよう配慮されていることが窺える。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	館内は段差がなく職員の死角になる部分は鏡やセンサーを設置して入居者の安全に努めている。また状態の変化に応じて、その方にとってわかりやすさを意識して部屋作りも行っている。		

自己評価および外部評価結果

ひろた3階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「感謝の気持ちを忘れずにやさしい手と確かな手で共に歩みます」の理念を職員全員が理解共有した上で、入居者の目線でその方の思いに心を寄せて支援させて頂いている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ボランティア、実習等の受け入れや保育所との交流など、地域の方々とのお付き合いが日常的に行われている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	介護教室の開催や地元の学校のインターンシップ、実習の受け入れの他、認知症サポーター養成講座にキャラバンメイトとして出向くなど、地域の方々に対し事業所の専門性を還元できるよう努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年6回開催し、活動報告以外にもインシデントやアクシデント報告を検証から対策までの報告に対し、委員の皆様より客観的な意見や助言等も頂きながらサービスに反映できるように努めている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	管理者が中心となって行政と常に連絡を取り合い、必要な事柄は現場にタイムリーに伝達して情報の共有ができています。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ドアの施錠は日常的に行っていないが、帰宅願望の強い方に対しての声かけでは「待って」「後で一緒に帰りましょう」など、その時の状況に応じて対応しているが危険回避とは言え、スタッフ寄りの声掛けになっているのかもしれない。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	コンプライアンスルールを各部署、スタッフの目の届く所に掲示し、業務に当たり漫然とならぬよう各自が振り返りながら全スタッフで意識、共有化することで注意を払っている。		

8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	過去に後見人制度を利用する方がいて、制度の認識はしているが、より具体的なことに關しては理解に乏しい面もある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関しては管理者や主任が行っているが、他のスタッフも必要に応じて説明対応ができるように、日頃より契約書と重要事項説明書には目を通し理解するよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族来訪時には近況報告を行い、こちらから意見や要望等を聞き出す様な声かけを意識している。運営推進会議の委員にも家族代表の方おり、家族の立場での貴重な意見を運営に反映させている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	全体会議、主任会議の場や日常的にフロアにてスタッフに声をかけ意見や相談等を聞き解決へと導いてくれる。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	研修や資格取得などを促し各自に向上心を持ってよう努めたり、スタッフの体調面にも気にかけるなど、勤務の状況も把握されている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度の目標の中に研修に積極的に参加するというを掲げており、各々興味のあるテーマの研修を選んで参加しており、管理者からの促しもある。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	東部ブロック研修会で他のグループホームのスタッフと自分たちで考えた議題を元に意見交換を行い、交流を深めながら技術、知識向上に努めている。		

II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援				
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	まずは挨拶から行いコミュニケーションをとるよう心がけている。関係機関からの情報や個別面談、事前訪問の際のアセスメントの中で不安につながるものがあれば少しでも取り除くことができるように対応している。	
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前(申し込み・相談があった時)に家族に要望や現在困っていること、不安なことを聞き取り、安心して頂けるサービスの提供と環境作りに配慮をしている。	
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅生活の時とあまり変化がないように本人も家族も希望する内容がサービスとして導入できるように併設施設の協力も得ながら支援できるように努めている。	
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に生活している一人として、楽しみを共有したり出来ることをお互いに協力し合いながら共同生活を送っている。	
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居中の様子を面会の時や電話をした際に報告したり、今後の生活について相談し合ったり入居者を家族とスタッフの二人三脚で支え合えるような関係作りを心がけている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	通い慣れたデイサービスの友人やスタッフとの交流を楽しめる時間を作ったり、行き付けの美容院へ家族同伴で出かける方もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	それぞれの入居者の性格や相性を見極めて席の配置を考え、個々のゆっくりとした時間を考慮する。日常生活ではレクやアク、家事的な作業を通して交流の機会を作り、必要に応じてスタッフが介入し関係性を取り持っている。	
22		○関係を断ち切らない仕組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	殆どの家族が同じ地域に住んでおられるため外でお会いした時は挨拶を交わしたり近況を聞いたりしている。またボランティア団体の一員として定期的に訪問したり、介護教室にも出席される。	

Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	「入居者様の思いや願いの実現に向け支援していく」の目標を元に、会話の中で知り得たことなどをメモに書き留め、少しでも具体化できるように取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時、入居後も必要に応じてこれまで在宅で慣れ親しんだ道具などをグループホーム内でも使用してもらったり、居室内も本人にとって判りやすく使い勝手が良いようにと配慮している。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活の中での気づきを記録した業務日誌や、朝・夕の申し送りの場以外にも、職員間で話し合う時間があればタイムリーに課題の確認や今後の対処についても常に共有している。	
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	事前検討用紙に職員の意見を集約し、入居者と家族の意向の確認、アセスメントを経てカンファレンスを実施。本人目線と客観的事実、情報と照らしながら個々の生活に反映したプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	サービスチェック表には提供したサービスの内容や本人の状態を書き、業務日誌には日々の生活の中での気づきや変化を記入する。職員間で情報共有しながら実践につなげプランの評価や見直しを行っている。	
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	併設事業所とも連携協力しながら、本人や家族の希望等に応じることができるよう日頃から柔軟な対応を心がけている。	
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	巡回図書、訪問美容、歯科往診、地域住民の演芸ボランティア、学校からの実習や保育所との交流など、入居者の目線で捉えてみても地域の方々とのふれ合う機会が普通にあることがありがたい。	

30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	母体の村上医院の定期受診以外に眼科、歯科、皮膚科等の他、緊急時の他の医療機関との連携もスムーズに出来ている。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	母体医院の看護師との申し送りノートを通して日々の入居者の健康状態を把握し適切な受診に繋がっている。また当院の看護師が週1回事業所を訪れスタッフがアドバイスを受けるなど相互で現状の把握に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院先の地域連携室と常に連絡を取り合いながら退院後の対応を早期より準備している。また救急搬送時には佐世保市在宅医療介護連携協議会が策定した情報提供書を活用し、救急隊、搬送先の医療機関との連携に役立っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合は、家族の意向を確認しながら主治医、看護師長、管理者、主任らと協議チーム全体として取り組んでいる。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時に備えて必要な緊急セットはスタッフルーム出入り口に設置し、取り扱いについても勉強会や訓練を行い実践できるようにしている。いざとなると緊張して適格な行動に不安はあるので自ら学ぶ姿勢を持つ必要がある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	外部評価でアドバイスを受けたことも実際に訓練に活かしながら職員の防災意識を高めている。普段から母体医院と併設事業所との連携を重視し消防署立会の元で防火訓練を行っているが、自然災害想定訓練は未実施である。		

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の生活歴や性格、習慣等を考慮しながら言葉かけをするよう心がけている。月1回の接遇委員会では併設事業所からの客観的な意見も含め相手に対するマナーを大切にしている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者に尋ねるときは疑問形にして答えを出してもらえるような聴き方を心がけ、上手く表現ができない方にはその方の表情や会話のやりとりの中から思いを読み取る努力をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的には一人ひとりのペースに合わせて過ごして頂いているが、いつも定位置に誘導をして座って頂いている方に対しては、こちらの業務の流れに合わせた動きをさせてしまっているのかもしれない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その日の気候や状況を踏まえ、本人の希望を尊重しながら衣類を選んで頂いたりしている。行事や外出をする時は化粧などおしゃれを促している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	日常の会話を通してそれぞれの好みを聞き取り献立に組み入れている。また咀嚼や嚥下状態に応じた形態で食事を提供している。食事の準備や片付けも個々の関心や能力に応じて手伝って頂いている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	生活チェック表でバイタル、食事摂取量、排泄に関する情報を日々把握しながら栄養管理に努めている。食欲低下の方には家族とも協力して好みのものやカロリー食を提供するなど、医療とも連携して支援をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの力に応じて、準備まで、見守り、全介助などと個別対応をしている。歯間ブラシや口腔用スポンジなどを用いて残渣物を取り除けるよう、個々に応じたやり方で行っている。		

43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	時間を確認しながら声掛けを行ったり、動きなどでサインを読み取って誘導している。本人のタイミングでトイレに行かれた場合も、排泄の状況に応じて「汚れていませんか？」など声かけし交換している。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分の促しや寒天を提供したり、排泄はなるべく便座に座って頂き、必要に応じて腹部マッサージをするなど対応している。下剤も個々で効き方が違うことも把握した上で服用して頂いている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	異性から介助されるのを拒む方もいるので、その日のスタッフ間で話し合い、入浴担当を変更するなど柔軟に対応している。入浴拒否する方には代替えの支援やタイミングを見極めて支援するよう心がけている。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その日の体調や睡眠状態、また本人の訴えの状況等を考慮しながら休息を促したり、日中は軽度体を動かし夜間の安眠に繋げることができるよう心がけている。入床時の照明や室温も個別に配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬紙は個別にファイルに挟め、処方日にはお薬手帳にその都度保管する。服薬時間がそれぞれ違う方もいれば、錠剤のままだと飲めない方には粉碎して飲んで頂いたり量が多い方は小分けにして服用して頂いている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	それぞれが負担とならない範囲で楽しみながら役割として担って頂きスタッフもさりげなく介入し支援している。併設のデイサービスの利用者にも親しい友人がいるため、定期的に訪問し交流を継続して気分転換にもなっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	季節に応じた外出支援を心がけているが、日常的にタイムリーに外出が出来ていないのが現状。職員での対応が難しい時は家族にも協力してもらえるよう努めている。		

50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人でお金を管理している方は数名で、管理ができない方は職員の方で預かり金として管理させて頂き、買い物や外出時には使えるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自室内に家族が電話を設置してくれている方もいれば、携帯電話を使用している方もいる。電話の要求があった時や外線が入った際は本人に取次ぎ必要に応じて職員が補足している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	空調に布のカバーをして入居者に直接風が当たらないように工夫した。食卓に近いトイレには消臭剤を配置。壁面は入居者が作成した季節感のある貼り絵や行事の写真を掲示して、少しでも四季を感じられるよう配慮している。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	それぞれの定位置は決まっておられるが、作業やレクリエーションの際は意図的に位置をアレンジして交流の機会を増やしている。エレベーターホールにはベンチを設置して日向ぼっこや友人とのおしゃべりなど自由に活用して頂いている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	愛用品や思い出の写真を飾り、家族と本人とで居心地の良い空間作りを工夫されている。ベッドや家具などの配置も動線も考慮して配置している。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	すべてを手助けするのではなく、一人ひとりの「できる」ところを把握した上で残存能力を活かせるように、廊下や浴室、トイレの手すりなど既存の空間に加えて、状況に応じて安全面で必要であればその都度工夫を重ねている。		